

$z$  に沿って粒子を単位時間単位面積当たり  $N$  個入射する． $z$  軸から距離  $b$  (衝突パラメータ)，角度  $d\phi$ ，面積  $dS'$  のスリットを単位時間当たりに通過する粒子数は

$$N dS' = N d\phi (b d\phi) \quad (0.0.1)$$

を満たす．また，単位時間に検出器に到達する粒子数は微分断面積の定義から，

$$dN = \sigma(\theta) N d\Omega \quad (0.0.2)$$

である．古典力学ではこれらは必ず一致するため，

$$\sigma(\theta) N d\Omega = N d\phi (b d\phi) \quad (0.0.3)$$

を得る．よって，微分断面積は

$$\sigma(\theta) = \frac{1}{\sin \theta} b \left| \frac{db}{d\theta} \right| \quad (0.0.4)$$

と表される．

### 例題 0.1: 剛体球

散乱体を半径  $a$  の剛体球

$$V(r) = \begin{cases} \infty & (r < a) \\ 0 & (r > a) \end{cases} \quad (0.0.5)$$

とする．衝突パラメータを  $b$ ，粒子が散乱体の角度  $\phi$  の位置で散乱し，その散乱角を  $\theta$  とする．これらは

$$\begin{cases} 2\phi + \theta = \pi \\ b = a \sin \phi \end{cases} \quad (0.0.6)$$

を満たすため，

$$b = a \cos \frac{\theta}{2} \quad (0.0.7)$$

を得る．よって，微分断面積は

$$\sigma(\theta) = \frac{1}{\sin \theta} b \left| \frac{db}{d\theta} \right| \quad (0.0.8)$$

$$= \frac{a^2}{4} \quad (0.0.9)$$

となる． $\theta$  に依存しない等方散乱であることがわかる．また，全断面積は

$$\sigma^{\text{tot}} = \int \sigma(\theta) d\Omega = \pi a^2 \quad (0.0.10)$$

である．剛体球の断面積と一致する．